

暮らしの中の
「音」について

吉永早苗
猶原和子
佐々木麻美
石塚美穂子
宮里暁美
(進行)

暮らしの中には音がある

宮里 「暮らし」という視点に「音」という切り口を重ねて、保育のことや子どもたちのことを語りあいたいと考えて、音や保育にかかわっている4人の方に集まっていたいただきました。よろしく願います。

吉永 最近見たテレビの番組で「食べ物の音

を感じる」というのがあって、料理をするときの音をすごくリアルに捉えていて、その音がすごくおいしそうですね。

音の中に温度を感じるし、匂いも出てくるような感じだった。そういう音をあらためて聴いてみるって、すごく大事だと感じています。

佐々木 幼稚園ではシイの実とかよく食べるのですが、「堅いからカリカリっていう音がするね」なんて話したりしたことがあります。

石塚 こども園の0歳の子どもたちは、食事をしていてかみづらかつたりすると、べべ、べべと音を出したり、すっぱかったら、すっぱい！という顔をしたりということ、ありますね。もう少し大きくなると、キュウリを食べると「カリカリするね」とか、言葉が出てくるんで



▲吉永早苗氏

吉永早苗（東京家政学院大学教授）
佐々木麻美（お茶の水女子大学附属幼稚園教諭）
宮里暁美（文京区立お茶の水女子大学こども園園長）

猶原和子（江戸川大学教授）
石塚美穂子（文京区立お茶の水女子大学こども園保育士）

すね。0歳児はやっぱり、食べながら、音も味も全部が初めてのことばかりなので、いろんなことを感じているんだろうなと思います。

うれしい音と気になる音

宮里 子どもたちのつぶやきや、「あー」とかいう声が柔らかく響いている保育室って、いいな、うれしい音だなと思うのです。

猶原 たぶん、言語にはならなくても、身振り手振り、そこでささやかれている声とかが合わさって、子どもの中に内的な言語として残っていくのだと思うんです。その内的な言



▲猶原和子氏

語が充実して豊かになってきたときに、意味のある言語として現れてくる、そういうことがあるように感じます。

吉永 そういう内的な言語がアウトプットのときの引き出しの中身になっていて、それが声になっていくっていうことなんですよね。だからちっちゃい子も、まだ口には出していないけれども、いっぱいいっぱい、実はインプットしているっていう。

猶原 それはきつと保育の場面でも丁寧にされていることなのではないでしょうか。私は以前小学校の教師をしていたのでその立場でいうと、見事だと思うのです。その子が何を感じているのかとか、なぜその子がその音に反応しているのかとか、その子に寄り添って理解しようとする。その姿勢は、幼小連携の研究の中で私がすごく学んだことです。

宮里 逆に、気になる音のことなんですけれども、こども園で給食の配膳をしているときに思うのですが、気持ち音が音に出るような気がします。早めにやらなくちゃ、と思つてすると、急にガシャガシャという音がしてくる。

焦った空気になるんです。音がすごく空気を
つくるなど感じていきます。だからそういうと
きに深呼吸をして落ち着いて行動するように
すると、焦った音が消えていきます。

吉永 焦りの音が消えるって本当ですね。病
室での音の研究の話ですが、病気の方が寝て
いるときに耳元で感じる音って、すごく不快
な音があつたりするんですね。恐怖感とか
嫌な感じとか。音環境って、保育よりも前に
看護師さんたちの現場での先行研究を読んだ
ことがあります。

音を聴き分けて何か感じている0歳児

石塚 0歳児の部屋に、振ると鳴る音がそれ
ぞれ微妙に違う小さな積み木があります。そ
れを0歳の子どもたちがカタカタ、カタカタ
って交互に振ったときに、「あれ？」っていう
表情をする。こんなに小さな子でも、音を聴
いて聴き分けて何か感じているのだというこ

とに気づいて、そこから音ってすごく大事だ
なって思うようになりました。感触を楽しむ
おもちゃを用意したときに、音のことは意識
せず、ただ危なくないようにとゴムで結び付
けておいたら、ゴムでくっ付けてあるのを引
っ張ってはパチン！ というのを楽しんでい
たんです。面白いというのと音っていうのは
つながるみたいです。

宮里 音って見つけるものなのかもしれない
ですね。

石塚 散歩に出かけたときにも、石を拾うと
いろいろなところをカンカンとしてみる。ア
スファルトのところ
でやったり、ベンチ
の上でやったり。き
っと音の違いを感じ
て、試して、聴いて
いたんだなと思いま
す。



▲石塚美穂子氏

吉永 それをよく見ておられるなと思いますね。確かに、音で散策しているのだと思うんですけれども、そこを「何やってるの？」じゃなくて「そうなんだね」って。そこで「あ、音が違うよね」って共感があつて、子どもはもつともつとそれが楽しくなつて、そこから先に何があるかというところに行くんだと思ふし。たいたいときのリズムが面白かったら、それがまた別のところでアウトプットされて、後で音のリズムとしても出てくるんだらと思つたりしますね。いいエピソードですね。

音に敏感な子どもについて聞いてみたい

佐々木 音に敏感な子に出会ったことがあります。例えばお弁当のときのくちやくちや食べる音とか、皆が話す声とかがうるさくて一緒に食べたくなつてなつたときに、私と彼で話して、離れた場所、廊下で食べることにしたんです。そんな彼が、幼稚園に新春を祝

う太鼓の人が来てくれたときに、小太鼓の人の横にずっと正座して聴いていた。「小太鼓の音が気に入った」と感想をも

らしていたようなのです。その頃、タンバリンを鳴らすのも好きでやっていました。好きな音を見つけていくことで、彼の中の音がどんどん豊かになって、部屋の中で一緒に食べるといふ選択もできるよくなりました。

吉永 敏感なお子さんですね。好きな音が見つかつてよかつたですね。カンカンカンという、締め太鼓の音がよかつたんですね。

宮里 締め太鼓は気持ちのいい音がしますよね。豆がポコポコポコつて踊るみたいな音！
吉永 何か見えるのかもしれないね。何か感覚的なものがね。



▲佐々木麻美氏

佐々木 ジャラジャラって音がするタンバリンがあつて。そのタンバリンを楽しんでいた後に出会ったのが太鼓です。

吉永 そのお子さんには、雑然としない音っていうのがいいのかもしれないね。整理された音が好きとか、自分がコントロールできるものだったらいいというか。

佐々木 曲に合わせてタンバリンをたたいていたときも、いろいろな楽器が登場して音が増えていくことがありました。その時は、「タンバリンたたくのは男だけだ」とか、「女はダメだ」とか言っていたのです。音がそれ以上増えないようにしたかったのかもしれない。たぶん音が秩序なく合わさっていく感じが嫌だったんだと思います。

小学校1年生と楽しんだ「音」

宮里 猶原先生は、以前は小学校の先生をされていました。小学生と音とのかかわりにつ

いてお話してください。

猶原 小学校1年生と、窓を開けて目をつぶって黙って耳を澄ます、というのをよくやりました。その後、「何の音が聴こえた？」と尋ねると、聴いているものが同じ車の音でも、まるつきり違う音で答えるんです。ある子は「ブー」と言い、またある子は「ギー、ビューン」と、感じ方の異なる言葉がいろいろと出てきます。また違う場面で、正面に幕を張って「何の音が聴こえる？」という遊びもしました。私が何度かやった後、「みんなも好きにやってみよう」と言っていると、予想もしない発表が続きます。何でもない自分の身近な音をつくって、例えば手で服のボタンを擦り合わせたり、定期入れを鉛筆ではじいたり。聴こえないんじゃないかって思うぐらいの小さな音、でも子どもたちにはそれが聴こえるんですよ。何なんだろうなって。全身でその音を共有しようとする。そういう姿を見ると、

子どもってすごい力があるなと感じます。

中学年になると、「どんな音楽でも、好きなことを持ち込んで発表できる」という時間があります。電車でこだわっている子は気に入っている電車の発車メロディーにこだわり、仲間と一緒に山手線や新幹線の発車メロディーを、音色まで含めて探求し続けました。このような姿に影響されて、音っていうのが自分たちの空間にいろいろあって、聴こうと思えばいろんな聴こえ方がするというのを子どもたちは楽しんでいました。

生活の中の「音」に着目してみたら

吉永 あることも園で「一日の音探し」というのを始めたんですね。私が見せていただいたのは、子どもが朝、聴こえてきた音を身の回りのもので表現するものでした。例えば、「ぐじゅぐじゅペーのうがいの音です」とかかって、豆を入れたコップを横に軽く振った

後、縦に強く1回振り下ろすとか。それからニワトリの音を出すといって、硬い紙の筒を棒でたたいて、本当に「コケコッコー」って聴こえるのです。目覚まし時計の音もいろいろとあって、そういった生活の中の音を、生活の中の物を使って自分なりの音に置き換えて表現する。そこにはすごく試行錯誤があつて。よく聴いて、表現して、まだ違う、じゃあどんなものだったらと、それに似た音を探すことを繰り返している。そういう経験をしていくことが、実は楽器の演奏をするときの、思いや意図を表現する素敵な音づくりにつながっていくと思うのですね。

猶原 先ほどお話しした、電車に夢中になっていた子は、もともとはキーボードが弾けなかつたのですが、好きなことをやり続けていくうちに、技術が向上し、キーボードを弾く手の形も自然できれいなものになりました。それがすごいなと思うんです。また、太鼓に

夢中になった子が仲間を集めて卒業公演を行うことになったとき、自分たちでこれだつて思う映像を繰り返し見ながらまねするんです。いろいろ葛藤もあつただけけれども、パーンと飛躍する日が突然やつて来て、本当に無駄な動きがなくなつた。音が変わる瞬間つていうか、音色がパツと変わるんですよ。からだと音、それが全部つながつて、充実した音が空間に響くというか、そういうのを見せてもらったことがあります。周りの音と一緒にからだ共振しているというか、仲間同士が共振するというか。そういうことがあつて感動したことを覚えています。

そこに景色が見えているかどうか

宮里 いい話ですね。からだ、音、楽器と進んで、またからだに戻りましたね。最近見た映像でシヨックを受けたものがあります。どこかの園の音楽会の様子ですが、からだ中で

すごく頑張つて、がなるように歌っていたのです。美しさも何もない。保育の場で、「大きい声で歌つて」と言つてしまうことつてあるように思います。あの時に何が問題かつていうと、私はからだなんじゃないかなつて思っています。

吉永 一生懸命なんですけどね。でも、なんか違うんですよ。

宮里 そう。一生懸命なだけけれど、なんか違う。

吉永 なんかわ違う。私が思うのは、そこに景色が見えているかどうかつていう違いがあるんじゃないかと思うんですよ。

「夕焼けこ焼け」(中村雨紅・詞／草川信・曲)つて歌がありますけど、「子どもたちがすごく歌つて歌つてしまふのでどうしたらいいですか」つて相談を受けたことがあつて、「みんなと一緒に夕日を見に行つてみてください」つて答えたのです。そして先生が子どもたち

と一緒に夕日を見に行つて、滑り台の上にながって、みんな夕日を見つめて、「夕日がきれいだな」「お日様が沈むな」「お寺の鐘が聴こえてきた」「カラスが鳴いてなんとなく寂しい感じだな」など、子どももいろいろと感じるわけですよ。するとその後、先生が何も言わなくても、「なんかつないで歌ったほうがきれいに聴こえるね」とか、「なんとなく寂しい感じがする歌なんだね」とか子ども自身も歌の内容に気づいていって、先生が何も言わなくても歌声が変わったそうです。

宮里 そこに景色が見えてきて、歌い方が変わってくるんですね。

吉永 新幼稚園教育要領の領域「表現」の内容の取扱いのところで、具体的に、風の音や雨の音への気付きに言及していただいています。音なんだけれども、その風の音、雨の音は聴くだけじゃなくて、からだでも感じているのですよね。雨の匂いも感触も感じている

し、からだの諸感覚で捉えると思うのですよね。そうすると例えば「あめふりくまのこ」（鶴見正夫・詞／湯山昭・曲）の歌も、「あとからあとから降ってくる」という雨の景色が、からだで感じたことと共に声になつていくのかなというふうに。やっぱりからだで声、からだで音楽というのが切り離せませんね。**猶原** そうですね。そのあたりが、息遣いつてことかなと思います。

思わずからだから出てくる柔らかな声

宮里 こども園で、風が吹き上がるような面白い装置を作つて遊んだことがあります。風を受けてスカーフのような薄い布がふわっと舞い上がる。それを見た0歳の子どもたちが布を見上げながら「あー」と声を上げる、その柔らかな声が心に残っています。

石塚 ふわふわつというふうにはスカーフが舞つたときに、「あー」って言つてましたよね。



▲宮里暁美氏

宮里 別の機会があつて「キヤーキヤー」という声が出ていた。どうしてそうなるんだろうと思つたら、その時は次々に舞い上がる紙吹雪みたいな感じで、

宮里 布の動きとぴったり合うように「ふあー」つて子どもたちが言う。その音なのですよ。湧き起こるようにして出てきた声でした。

吉永 スカーフになつていたのでしょね。

宮里 なるほど、スカーフになつていゝのね。からだが開いてるのでしょね。

石塚 その時に思わず声も出ちやうのですね。からだか動いてしまふのですね。

吉永 それは、すぐくまろやかな驚きの声なのですな。

ふわりという感じではなかつたんです。しばらくそばにいて、ふわつと舞い上がるスカーフを出して、その布が舞い上がる様子をゆくり見ながら私が「あー」と言つていたら、少しずつ「あー」の声が出てきた。あの時、私は音にこだわつたけれど、大事なのはスカーフになるといふことだつたんですね。「ふわー」つてスカーフと一緒になつたときに、声が出てくるのですな。

音になつてみる

吉永 ピアノのレッスンをしていたとき、よくやつていたのが「音になつてみて」です。「音がどっちに行きたがつていゝのかな、向かつていゝのかな」と感じて、「音になつてみて」つて。そうやつてから演奏すると、やつぱりからだ感が出てくるのですよな。(笑)

猶原 何か変わるんですね。近くなるというか、融合されるというか、ものにも入つてい

くし、逆にそつちが自分のほうに入ってくるとか。そういう往還性というようなものを感じます。

吉永 自分は環境を見ている、その環境もまた自分を見ている、というような往還性。そういうのがサウンドスケープになるのですよね。「サウンドスケープ」というのはマリリー・シェーファーがつくった造語なんですけど、「音の風景」ということで最近、よくメディアでも取り上げられています。音そのものも私たちの暮らしそのものなので、そこにもっと気づいて仲良くなって、いろいろと見直していこう、というようなことです。音がとにかくあふれてしまっていて、私たちは聴くっていうけれども、実は聴かないことを学んでいることも多い。だから、どういうふうにかサウンドスケープを広げていくかということ、「聴くことを学べばいいのだ」とサウンド・エデュケーションが始まったわけです。サウ

ンド・エデュケーションでは、例えば1分間目を閉じて、一番近くで聴こえる音は何だろう、一番遠くで聴こえる音は何だろう、動く音もあるよねって。あるいは、1枚の紙をできるだけ音をたてないように回してみようとか、1枚の新聞紙でいったい何種類の音をつくることができるかなというような問いかけをしたりします。

猶原 大学生も、それが新聞紙だと思っている間は面白いものではないんですよね。それに捉われてしまうから。でもそんな時にふつと自分が和らいでいくと、いろんな音を感じられるようになる。だから、よく大学生に授業をするときに、「ずっと黙って一切しゃべらないでね」と言って少し離れた教室に移動をしたりします。音楽室から別の部屋へと。階段を下りたり上ったりする間に音を感じて、どんな音が聴こえてくるかなとかいうことをやってみると、それぞれ全く違うものを発見



していて、それに創作が入ってくると、自分の経験が重なってくる。それがすごく面白いですよ。

吉永 そうですね。音には感情が伴っているですね。「音日記」というのを学生さんに書いてもらうと、台所の音には懐かしさや家族の温もりを感じる、と結んであることがあります。バイクの音には「彼が来た！」というドキドキが表現されていたり（笑）。音日記を書くためにイヤホンを外したら、玄関を開け

たときに「おはよう」っていう大家さんの声が聴こえて驚く。そして「私は今まで毎日『おはよう』って声をかけられていたかもしれないけれども、イヤホンをしていなかったから気がつか

ないで知らん顔していたのかもしれない。なんてことをしてしまったのかしら」とすごく申し訳なさがありがたさを感じたという声がありました。音の日記を書いてみると、自分の感情がどれだけ音と重なっているのかというところに気がつく学生が多かったです。ものの音に暮らしが見えるようになるんですね。大学1年生での実践でしたが、詩人や哲学者みたいな文章にも出会います。

保育の中の音について

宮里 保育の中にはいろいろな音があります。朝、朝って特別な感じがする。特別な音があるように思うんです。幼稚園はどうですか？

佐々木 朝一番は本当に、玄関が開くと子どもたちが入ってくる音が聴こえてきます。私は今一番奥の部屋なので、間に合っていない準備をしていたりすると、音がまず「来た来た来た」っていうか。

宮里 なるほど。私は穏やか系の音をイメー
ジしたけれど、「来たぞー」というような、「今
日が始まるー」という感じの音なんですね。
佐々木 穏やかではないですね（笑）。軽やか
というか、うれしい気持ちで来てるんだなっ
ていうのがわかる音です。

石塚 こども園は子どもたちが登園してくる
時間がバラバラなので、誰もいないところか
ら開いて、少しずつ音が重なってだんだん厚
みが出てくるような感じですね。そして子ど
もの声が少しずつ増えていって、そういう感
じでだんだんとにぎやかになっていきます。
生活が繰り返される。また帰りにはフェード
アウトもしていくので。

宮里 最近フェードアウトが好きなんです。
なんかそれが、暮らしたなあと。

吉永 私たち、音が鳴っているときは耳を澄
ませるんですけど、音が消える瞬間って、な
かなか聴くことがない。でも音って消えるん

ですよ。その消える瞬間を、しっかり耳を
澄ませるということをやった後に、聴力検査
をしたりしますと、聴力が上がっているん
です。持続するわけではないんですが。やつぱ
り聴くぞっていう態勢って大事なんですよ。
態勢ができる聴こえてくるということが発
見しました。

猶原 子どもたちについていろんな音があっても、
その中で自分に必要な音ってズバツと聴こえ
てくるっていうか、お互いを聴きあっている
なというか、それにはびつくりしますね。

吉永 それは小学生だからじゃないですかね。
猶原 そうかもしれないですね。

吉永 3、4、5歳ぐらいだと、まだカクテ
ルパーティー効果（自分に必要な情報のみ取
捨選択できる現象）っていうのが成立してな
いので、聴きたい音だけを取り出して聴くこ
とができず、全部受けて聴いてしまっ、し
んどくなってしまう。それが注意散漫の原因

だったりもするので、そういう意味でも音環境は大事だと言われているようです。

石塚 すごくそれに気をつけています。小さい人たちも、本当によく聴いているので、こっちで絵本を読んで穏やかに遊んでいるのだけれど、少しだけ離れた隣のスペースで遊んでいる人の音が大きいと、すごくいい雰囲気だったのが切れてしまう。だから、普段から大人の声の大きさについて気をつけていきましよう、と先生たちで話しあっています。

吉永 素晴らしいですね。

猶原 子どもは敏感に聴いていますからね。

音は共鳴しあう

佐々木 音が楽しくて、なんか共鳴しちゃうということ、ありますね。何かを転がしたり、飛び跳ねて音を出したり。みんな帰るときに飛び跳ねて帰ろうということがありました。「さようなら」って言ってジャンプしてドン！

みたいな。別に音の大きさじゃないのだけれど、みんなだからだと音とが響きあうというような、それが楽しかったみたいです。

宮里 それ、今日のテーマにすごく合っていますね。

佐々木 一人の子がやりたいと言って、それをみんなが楽しんだ。最初は、「なにになに？」っていう感じだったんだけど、やってみたら私もすごく楽しかった。みんなの気持ちのスーツと落ちて、じゃあ帰ろうというようになつた。

吉永 「ドン！」という音ではじめがつくみたいな感じですかね。なんか気持ちがよくって。

猶原 先生と一緒にやってみたら楽しかったっておっしゃったのはどのあたり？

佐々木 思い切り「ドン！」とすると。みんなの「楽しい」という気持ちが変わった感じですね。音も動きも、息がそろう感じとかがあったかと。

吉永 「そろろ」って、音楽の醍醐味なのですけれど、そういう瞬間をあえてつくろうとしたわけじゃなくて、合図して動かしたわけではないけれど、子どもたちが面白がってやっていたらそろろったっていう感じですね。

猶原 そこでみんなの息が合った瞬間が心地よい。そういう空間があるのがいいですね。指示が強い園ではそうならない。すごく直線的というか。「痛い」のです。その先生の姿勢とか園の姿勢とかもあると思うのですけれど、そこで交わされる音とか、聴こえてくる音の質が違う。それってやっぱり、恐ろしいことだなと思うのです。今、話しながらいろいろなことを思い出して、何かこう、心地よいなと思うときと、ちょっと痛いなというときがあつて、何なんだろうと思つていました。

吉永 見えないけれど、肌で感じるみたいな皮膚感覚があるのかもしれないですね。

宮里 すごく影響力のあるものですね。音は。

吉永 そうですね。

猶原 気がつかないけれど穏やかでいられるのは、そういう心地よいものに包まれているからかもしれない。

吉永 何か、肩の凝りも取れるようなね。そんな感じ。

音と私、それぞれの今とこれからについて

石塚 からだと音がつながつて、というところとか、音に入り込んでいるかとか、すごく印象的でした。音って面白いな、音って広いんだなと思いました。楽しいですね。

佐々木 からだが動く子は音を感じているのだな、子どもと音って近いのだなとわかつて、自分の中にそういう感覚をもう少しもつと、違うことが見えてくるのかなって思いました。



私、歌があまり得意じゃないのだけれど、聴いたりするのは好きで。同じことでもちよつと節をつけて言ったりすると、みんな面白がつて余裕が生まれる。そういう空間をつくつていきたいなつて思いました。

吉永 「音感受」という言葉が無藤隆先生（白梅学園大学大学院特任教授）と一緒につくりました。音を通じていろいろなことを考えたり、感じたり、想像を膨らませたり。音には触れることもできるし、音を見ることもできる。音を聴覚だけで捉えるのではなくて、からだの諸感覚で捉えていくつていうことをこれから考えていきたいなと思います。さまざまな感覚で音を捉えていくと、もつと暮らしが豊かになつていくし、想像力も豊かになつていくし、詩人も増えてくるように思うのですね。そうした、音が人をつないで、輪が広がつていつて、その先には明るい希望があつて、というようなのがいいなと思つていました。

猶原 子どもたちが「音が見える！」つて言つたときのことを思い出していて、彼らにこつてはちゃんと自分なりの世界が見えていて、自分のからだと世界との関係の中に音があるという感じだと思つてます。さつき、暮らしつておつしやつたけれど、子どもたちはさまざまなものとお会つて、飽きることなくかわる。よくぞ飽きないと思つて見ているけれど、常に新しいものがそこに生まれているのだらうなと思つて。そういうふうな学びを捉えたいと思つています。

宮里 今日は、私たちの周りにある「音」をテーマにしてたくさんのお話を頂き、考えるヒントをたくさん頂きました。ありがとうございました。

（2020年1月27日）

お茶の水女子大学附属幼稚園にて